



鳴る丘

「少年の家」20年の記録

品川 博



講談社



NDC 914 19.4cm

鐘の鳴る丘―少年の家二十年の記録

定価 四九〇円

昭和45年10月8日

第1刷発行

著者 品川 博

発行者 野間 省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号112

電話 東京 九四一三二（大代表）
振替口座 東京 三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社 文信社

☆落丁本・乱丁本はおとりかえします

© HIROSHI SHINAGAWA 1970

PRINTED IN JAPAN

0095-166577-2253 (0)

(学2)

光の中を歩む子ら——序にかえて

昭和二十一年三月十五日、「さらばラバウルよ、また来るまでは」の歌で名高い南方最大の基地ラバウルを後にして、同月二十三日冷たい雨の降る浦賀港に上陸した。無条件降伏というきびしい現実を背負った祖国日本の大地を踏みしめて、生きて帰ったという喜びよりも、日本の未来や自分自身の将来について、さまざまな不安と疑問とで頭がいっぱいだった。四日間の復員手続のうち、三月二十七日に正式に部隊を解散し、それぞれの懐かしの故郷に散っていったのである。

私は父母が生きているか否かが最大の不安であった。横須賀、横浜、東京——列車の窓からながめる焼野ガ原の大会の姿は、あまりにも悲惨であった。しかし上野駅に着いたとき、私はさらに大きなショックを受けたのであった。

私は大勢の戦災孤児にとりまかれて、食物を請求された。垢と汗にまみれてなんとも言えぬ悪臭が、子供たちから発散していた。子供の好きな私は、涙のあふれるのを押えることができなかった。かわいいさかりの子供たちがこのような姿で自分を迎えてくれたということが、私に一生を子供たちのためにささげる決心をさせたのである。

その日の夕刻、私は赤城山あかぎの麓ふもとにある故郷の村に帰った。父は急性肺炎で高熱にうなされており、一週間後の四月四日に私の帰るのを待っていたようにして他界した。私は悲嘆にくれた。私

が母の強い反対を押し切って戦災孤児の救済活動に入ったのは、父の四十九日もすまぬ五月初旬であった。

私は施設に勤めるために東京や群馬の関係者を訪問したけれど、私を採用するところはなかった。私はとりあえず自分でできることをしようと、東京まで自転車で食糧を運び、上野で孤児たちのために炊き出しをしたこともあった。

その年の秋、私は浜松の三方原学園、それから葵寮に勤務することになった。

浜松の生活一年、私たちの働いていた葵寮は、子供たちをやむをえぬ事情で監禁したことによって、アメリカ軍の指示によって解散したのである。私は自分で受け持っていた二十人の子供のうち六人の少年とともに、夢とも冒険ともいえる少年の家建設のため、捨身の生活に入った。

食糧もなく、体を休める宿もなく、上野の地下道や電車を宿として、十二月の寒空に、靴みがき、新聞売りで東京都内を働き、さまよい、必死に生き抜いた。

六人の子供も一人逃げて五人となった。毎夜十時に西郷さんの銅像の下に集まるのが約束で、私も入れて六人、肌と肌、血と血のふれ合った集まりであった。固い団結の同志であった。

古河のお寺に泊めてもらったこともあったが、ふとんがなくて真冬の寒気に蚊帳をふとん代わりにかぶって寝たこともあった。その寺は私の妹の嫁いだ日蓮宗の本成寺という寺であった。

そのころ古河駅のホームに熊沢蕃山の

憂きことのなのおこの上につもれかし

限りある身の力ためさん

という歌が書いてあった。古河は熊沢蕃山の墓のあるところである。私にとってこの歌は大きな教訓であり、宮沢賢治の「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」の詩とともに、この仕事をつづけるうえの心の支えとなったのであった。

昭和二十三年、私たちは赤城山麓富士見村の兄の家の離れに移り、魚の行商、靴みがき、キャNDER売りなどを一年ほどしたのち、十一月に前橋市高田町、前橋駅から歩いて十分ほどの住宅地に少年の家——八畳二間、十六坪（約五十平方メートル）の小さなものであったが——を建てたのであった。こうして汗と努力が実を結んで、「せまいながらも楽しいわが家」に私たちの夢を結ぶことができたのであった。

しかしその後も苦難の道はつづいた。借金の返済や子供たちの生活のために、内職のマッチのペーパー貼^はりや印刷のセールスに、子供たちとともに日夜働いたのであった。

昭和二十五年から飼いはじめたコリー犬が次々に子を生んで、それが数万円でとぶように売れ、大きな収入があったのはうれしいことであった。昭和二十七年に現在の大胡町^{おおご}に移転する際の土地代五十万円、建築費二百万円の半額以上は、コリー犬の収益によるものであった。

間接的にも、池田宣政氏^{のぶまさ}、竹田修氏など、コリー犬愛好者の方々と知り合い、少年の家のために大きなお力添えを受けるようになった。文字どおり少年たちに幸福を運ぶコリー犬であった。大胡町に購入した土地は一千坪の雑木林だった。その後一年間日曜ごとに、私と子供たちは十キロの道を前橋から大胡まで歩いて開墾に通ったのである。大きな雑木の根っこを小さい鍬^{くわ}一丁で掘り起こすことは、たいへんな労力を要した。しかし鐘の鳴る丘少年の家を建設するために、

子供たちも不平一つ言わずがんばった。

昭和二十八年十二月、高崎市の建設会社研屋の社長清水一郎氏の特別の援助によって、緑の丘の上に少年の家が建設された。私が六人の子供と浜松を出てから満六年の同月同日、十二月五日のことだった。子供の数も二十五人になっていた。私は神の恵み、人の情けのありがたさに、大地にひれ伏して感謝の涙を流したのであった。

昭和三十年にはブロック建材の製造事業を始め、その収益によって土地建物の拡張、設備の改善などを行なった。

当時の子供たちの中には、ヒロポン中毒その他でずいぶん私に迷惑をかけた者もいたが、私と協力して少年の家とともに成長していった子供たちもいた。特に伊藤幸男・斎藤房二の両名は、前橋高校から昭和医大、アメリカのローレンス大へとそれぞれ入学して、成功への道を一步一步築いていったのである。この子供たちの成功は、鐘の鳴る丘少年の家ができあがった以上に、私にはうれしく感激的なことであつた。伊藤幸男は不良の卵のような、ほんとうに手のかかった少年であつた。昭和三十二年八月三十日、アメリカの大学に留学する彼を羽田に見送った時は、何千万のお金をもらったより大きな喜びであつた。それは文字どおり光の中を歩む子供の姿であつた。暗い戦争の犠牲者がさまざまな苦難のうちに得た、栄光に輝く幸福の道であつた。

私は以上十年間の少年の家の建設記録と子供たちの成長を詳細にしるして、昭和三十三年講談社から『光の中を歩む子ら』という書名で出版した。以下は、その後の少年の家と子供たちの成長の記録である。

目次

光の中を歩む子ら 1

育てしわが子七百人

白狼の伯爵 11

三郎君の結婚式 26

戦慄の青酸カリ 37

気持ちがいは昼働かず夜寝ない 47

十七歳のお父さん 55

七年ぶり故郷に錦を飾る 87

大空まゆみさん、ごめんなさい 104

のど元過ぎれば熱さを忘れる 115

外国に行った子供たち 125

裸足の花嫁さん 129

尋ね尋ねて十七年 135

十二年ぶりの親子対面 137

希望に燃える若者たち 142

百万円の腕時計 150

孝行息子二人 155

石頭のしげちゃん 159

右手のない保母さん 164

ブロック工場倒産、差し押え 166

孤児とコリーと野良犬 173

後援会長木暮実千代さん 182

わが師と仰ぐ今村均將軍 184

鐘の鳴る丘創立二十周年祝典 191

吉川英治賞受賞 206

全国のお母様に訴える手紙

まえがき 219

従順はしつけの第一歩 222

他人に迷惑をかけぬこと 224

形あるものすべて生命あり 227

お便所の掃除は最も尊い仕事です 232

少年よ、大志をいだけ 240

一つのものに命をかけて 249

童心こそ子供の心の宝石です 252

人生相談

まえがき 263

浮気、よろめき、子供のしつけ 268

水はひくきに流れる 271

孤独の幸福 276

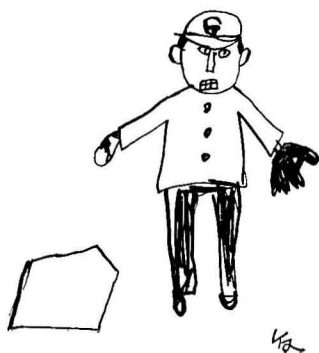
人生は美の探求である 286

現在の鐘の鳴る丘少年の家 290

あとがき 292

装丁・風間
完

育てしわが子七百人



白狼の伯爵 びやくろう

昭和二十三年六月十七日、群馬県赤城山麓の富士見村の小さな家で、まことに奇妙な誕生祝いが行なわれていた。五人の戦災孤児と一人の気品にあふれた青年が、朗らかに語り合っていた。ささやかながら心あたたかに、初対面でありながら十年の知己のごとく、かざらぬ裸の会話がつづけられた。この貴族的な青年はだれであろうか。

この青年の祖父は、戦時中の軍令部総長であったY宮様である。母はこのY宮様の女王様であり、父は真田幸村まんだゆきむらの直系の子孫であるT元伯爵であった。

この皇族の血を享けた青年も、その教養しやうぎやうな過去は五人の戦災孤児とたいして変わってはいなかったのである。だからこそ、話のうまが合って楽しい語らいがつづけられたのであった。そして私も、いまだ知らぬ貴族の家庭の本当の姿を、興味深く聞いたのである。

「なんだ、宮様の孫だって、おれたちとちっとも変わってねえぞ」

「そうだよ、君たちのほうが僕よりずっと幸福だよ」

「でも、よくこんなところに来てくれたね」

「いや、君たちの手紙を僕は涙を流しながら読んだんだ。世の中の人がみんな冷たい人ばかりだと思っていたのは僕のまちが이었다。警察の留置場で、こんな優しい手紙をくれるのはどんな

人たちだろうと考えて、自分に生きる希望がわいてきたよ。一日も早く会いたかった」

「Nさんの二十回目の誕生日に乾杯！」

サイダーとみつ豆が、きょうのごちそうである。

「僕は、群馬県については、伊香保温泉と草津温泉、それに赤城山と国定忠治くらいしか知らなかった。群馬には今でも国定忠治みたいな人がいるんだね」

「国定忠治は、ここにゐる僕たちの先生だよ。僕が板割の浅太郎、この人が日光の円蔵、こっちは大前田英五郎……」

講談本の好きな伊藤幸男が、おもしろおかしく冗談をとばした。

私はその前年、浜松葵寮の騒ぎの時に調停に入ってくださった静岡の長谷川保代議士が、「君は国定忠治の血をひいてるのかね」と言われたことを思い出した。

「じゃ、Nさんの誕生祝いに『赤城の子守唄』を歌おう」

坊や男だねんねしな

親がないと泣くものか

.....

「僕は『名月赤城山』を歌おう」とN君。

男心に男が惚れて

意気がとけあう赤城山

.....

誕生祝いは夜の更けるまでつづいた。外には蛙が鳴き、螢が美しい光を流していた。

この日をさかのぼる二週間前、N君は淀橋署の冷たい留置場に、恐喝、詐欺、公文書偽造の罪で逮捕されていたのである。同じような境遇に同情した五人の子供たちが淀橋署あてに激励の手紙を出したところ、N君は釈放後すぐにこの富士見村を訪ねてきて、今夜の誕生祝いになったのであった。全くの偶然で、この日は彼の二十回目の誕生日だったからである。

皇族の孫として生まれながら、N君はこのような楽しい誕生日ははじめてだと言う。世が世ならば、皇族の親族として、彼はわれわれの遠く及ばぬ世界の人間であった。

昭和十一年、彼が八歳のとき、女王様であった母が死んだ。このときから彼の運命は、暗い冷たい道をたどりはじめるのだ。

継母として、元キャバレーのダンサーが迎えられた。幸福だった家庭の空気は一変した。ゆがめられた運命は彼の人生を軌道から踏みはずさせた。この新しい母を、彼の父は無理矢理に「お母さん」と呼ばせようとした。それに反抗したN君を、父は二階の階段から突き落としたという。そのころ一家は塩原温泉の別荘に滞在していた。N君は、塩原から東北線の黒磯まで泣きながら走りつづけて東京に出た、と私に語った。

終戦直前、渋谷の屋敷を空襲で焼失、一時実母の里方Y宮家の熱海の別荘に落ち着き、その後塩原の別荘に移った。N君はそこから、学徒勤労隊員として山形県の鶴岡市に動員された。

終戦後は、世田谷の姉の嫁ぎ先O伯家から学習院に通っていたが、実家からは一円の仕送りもなく、ついに転落の道をたどるのである。それから足かけ三年、詐欺・窃盗・恐喝と本格的な犯

罪生活が始まり、銀座では「白狼の伯爵」というニックネームで呼ばれるボスの存在となった。

不良の仲間入りをしたとはいえ、家柄・血統・育ち、いずれも一流のこの与太者のお兄さんは、みんなから兄貴兄貴と下にもおかぬ待遇を受けたらしい。

その年の十一月、少年の家は前橋に移転し、彼は少年の家の人となった。といっても、職員としてではなく、児童ではもちろんなかった。

彼はたいへん順調に更生の道をたどった。二カ月ほどたって、彼は再び東京に出ていった。犬養健さんの家から大学に入学するためであった。

私もときどき犬養家を訪れた。中央線の信濃町の駅で降りるとすぐの、豪壮な邸宅だった。玄関を入ると、「話せばわかる」の名言を残されて五・一五事件に尊い生涯を終えた犬養毅元首相の大きな肖像画がかかっていた。私はそこで犬養健氏夫人仲子様にもたびたびお会いして、くれぐれもN君のことをお願いしたのであった。

そのころのことが新聞記事に詳しく報道されたので、そのまま次に記すことにする。

愛と信仰に蘇える

社会事業家への道にいそしむ

「転落の詩集」のN君

N君は元伯爵T氏（五二）を父に、元Y宮家から出たA子夫人を母に持つ封建時代の寵児として幸福な生活を続けてきたが、昭和十一年彼が八歳のときA子夫人の死によって、人生の軌道を踏みはず